

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Gadus chalcogrammus*

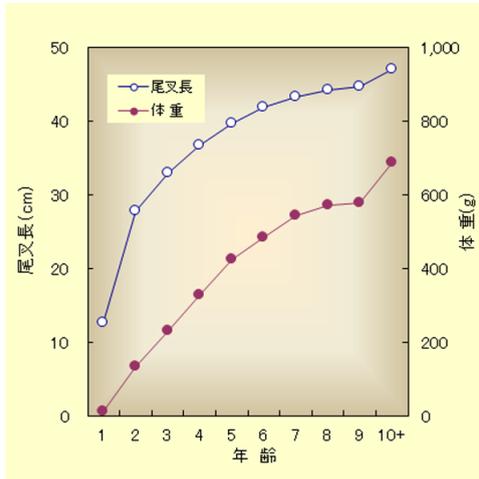
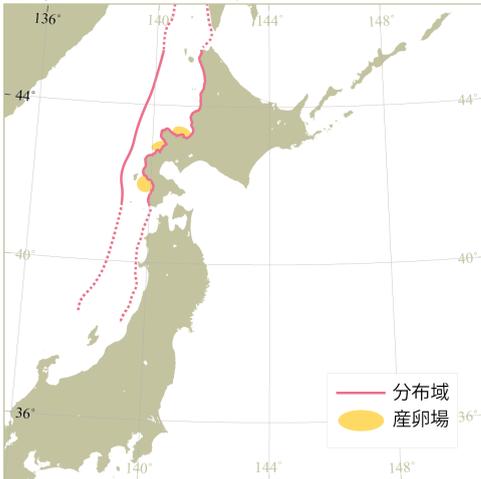
系群名 日本海北部系群

担当水研 北海道区水産研究所
中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 不明(10歳以上)
成熟開始年齢： 雌は3歳(およそ30%)、5歳(およそ100%)
産卵期・産卵場： 12～翌年3月、盛期は1～2月、現在の主要な産卵場は岩内湾および檜山海域の乙部沖
食性： 主に端脚類、オキアミ類、その他にイカ類、環形動物、小型魚類、底生甲殻類など
捕食者： 海獣類

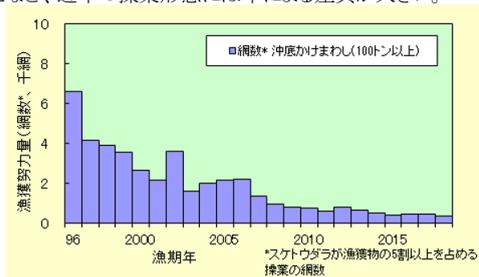
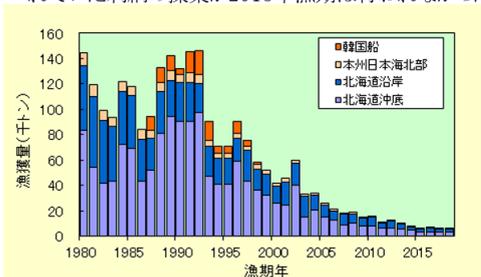


漁業の特徴

本系群は沖合底びき網(沖底)、はえ縄、刺網などで漁獲されている。主漁場は北海道西部日本海海域である。檜山～後志地方沿岸では沿岸漁業によって産卵親魚が漁獲され、石狩湾以北の海域では沖底によって7～8月の禁漁期を除き周年漁獲が行われている。韓国による漁獲は1987～1998年漁期(4～翌年3月)に行われていたが、1999年漁期以降は行われていない。

漁獲の動向

漁期年(4～翌年3月)で集計した漁獲量は、1970～1992年漁期は8.4万～16.9万トンで増減を繰り返していたが、1993年漁期以降減少傾向にある。2015年漁期以降はTAC数量の削減に併せた操業調整が特に顕著に行われており、2018年漁期の漁獲量は5,600トンと低い水準となっている。努力量も同様に減少傾向にある。また沖底では利用される漁場が年により大きく変化しており、沿岸漁業でも檜山地区で2015年漁期からはえ縄漁期終了後に実施されていた刺網の操業が2018年漁期は行われなかったなど、近年の操業形態には年による差異が大きい。

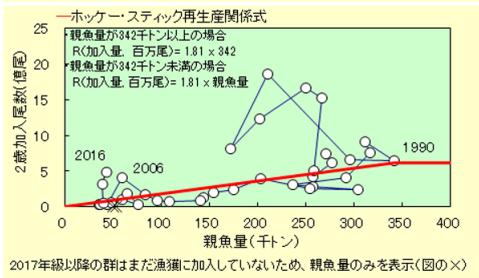
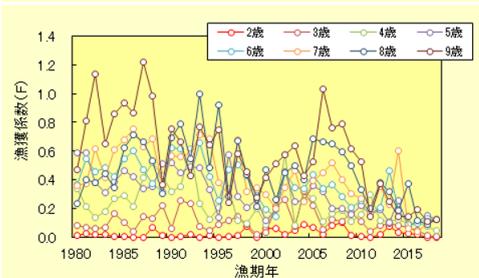
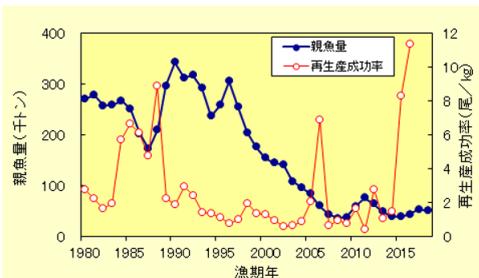
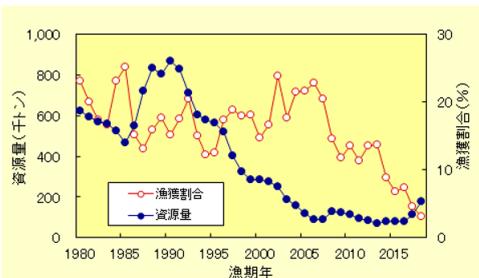


資源評価法

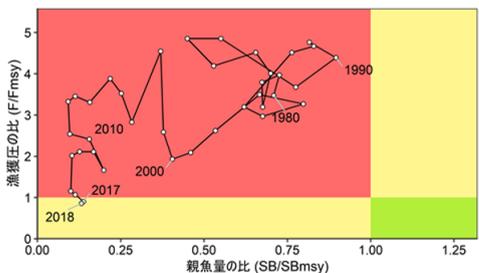
調査船調査による親魚量、0歳魚、1歳魚の各現存量推定値、および1980年以降の漁期年で集計した年齢別漁獲尾数と年齢別平均体重を用いたコホート解析により2歳以上の年齢別資源尾数・重量を推定した。最近年の漁獲係数(F)は最近年の5歳以上の選択率については一定であるとして、Fにリッジベナルティを付与したコホート解析により資源量推定値が日本海スケトウダラ新規加入量調査(石狩湾以北日本海(4月)、武蔵堆周辺海域(8～9月)、道西日本海海域(10月))における現存量と最も合うよう探索的に値を求めた。

資源状態

資源量は高い水準の後減少したが、2008年漁期以降は加入量の変動に応じて増減している。2014年漁期以降は増加傾向にあり、2018年漁期の資源量は17.9万トンであった。親魚量も高い水準の後減少し2008年漁期に3.5万トンとなったが、その後は資源量と同様に増減している。2016年漁期以降は増加傾向であり、2018年漁期は5.0万トンであった。漁獲圧(漁獲係数:F)は年齢ごとに変動パターンが異なるが、全年齢において近年では低い傾向となっている。再生産関係(昨年度評価での1980～2015年級群の推定値に基づく)にホッケア・スティック型関係式を適用して算出した最大持続生産量(MSY)は4.3万トンである。親魚量は全期間においてMSYを実現する水準(SBmsy:38.2万トン)を下回っており、2018年漁期の親魚量はSBmsyの0.13倍である(SB2018/SBmsy=0.13)。各年のFは、2017年漁期以降はMSYを実現する漁獲圧(Fmsy)を下回っており、2018年漁期のFはFmsyの0.86倍である(F2018/Fmsy=0.86)。親魚量の動向は近年5年間(2014～2018年漁期)の推移から増加と判断される。



2017年級以降の群はまだ漁獲に加入していないため、親魚量のみを表示(図の×)



資源評価のまとめ

- 2018年漁期の資源量(2歳以上)は17.9万トン、親魚量は5.0万トン
- 2018年漁期の親魚量はSBmsy(38.2万トン)を下回る(SB2018/SBmsy=0.13)
- 2018年漁期のFはFmsyを下回る(F2018/Fmsy=0.86)
- 親魚量の動向は近年5年間(2014~2018年漁期)の推移から「増加」と判断される

執筆者: 山下夕帆・境 磨・千村昌之・石野光弘

上記の再生産関係はMSYを実現する親魚量および漁獲圧を算出するため、研究機関会議での検討を踏まえて提案したものである。

資源評価は毎年更新されます。